

かがみやまこきょうのにしきえ

ぞうりうち

加賀見山旧錦絵

草履打の段

〔解説〕

天明二年（一七八二）江戸薩摩外記座初演。容楊黛（ようようたい）作。大名家のお家騒動を題材とした時代物です。「草履打」は実際に武家で起こった事件がもとになっています。お家乗っ取りの一味、局の岩藤（いわふじ）らは、その陰謀を知ってしまった町人出身の中老尾上（おのえ）を執拗に苛めます。草履打ちの辱めから自害してしまう尾上ですが、尾上に仕える女中お初が敵を討ち、お家騒動も解決となります。

〔草履打ちの段 あらすじ〕

町人の娘ながら重用される中老尾上を妬む岩藤は、町人出身ゆえに武芸の嗜みはなかりと、鶴ヶ岡八幡への代参の折に試合を仕掛けます。岩藤の苛めは更に度を増し、汚れた草履で尾上を打ち据えますが、なんとかその場を堪え忍んだ尾上は、その草履を懐に館への帰路につきます。

勇ましき、かしこき神の神諫め。折から告ぐる供廻り。

「いざ御立ち」

と夕ばえの、中老尾上先に立ち、多くの女中が取囲み、

対の帽子も一樣に群れゐる鷺のごとくにて帰り申しの鳥

居前。跡打見やり局岩藤

「ナント尾上殿、町人には珍しいあの善六、町人は賤し

いものと感心したいまの云ひ様、ヤ、コリヤほんに此様

へは差合さしあひであつたものオホ、、、、、私としたことがつ

か／＼と気の毒なオホ、、、、、イヤナニ尾上殿へ、こ

なさんの宿といふは金持なれど町人、仮親しての御奉公。

スリヤ今わしがいふたこと気に障りやしませぬか」

と、味なところへ仕かける意地と、思へどわざとそらさ

ぬ顔。

「これはまた岩藤様の痛み入ります御挨拶。何の私が左

様なこと。が仰つしやる通り親どもがお出入の縁をもち

まして、かやうな重い御奉公も有難い身の幸せ。根が町

人の私がこと、さぞや不束な事ばかりでござりましょ。

この上とても岩藤様、はゞかりながらよい様に、お指図

たのみ上げます」

と柳ながしのしなやかに云廻したる利発さよ。

「ヲ、何ぢやえ、町人の娘御故、たらはぬ事を指図して

くれいかえ、ホンニつべこべ／＼と薄い唇ぢやのう、ナ

ンノお前の御發明で私が指図受けさうな事かいの。つい

でぢやによつて云ひますが、こなさんの親御といふはお

屋敷のお金御用を勤めやるといふその用達顔の高慢が鼻

の先へぶらついてコレ、この顔に見えるわいの／＼、イ

ヤまた上の事いふぢやないが金の威光はきついものぢや、

この後とても、その金持顔やめにして下され、ヤ、ヤ、

ヤ。お役向は御中老。この岩藤は局役ヲ、お局役、お表

ならば御用人格ぢやぞや。女一通りは勿論、万一狼藉者、

盜賊などが忍び入る、サその時は役柄ぢや。女ながらも御前の固め、討止める器量がなけりや勤らぬ御奉公ぢやが、定めて長刀の一手も心得がござらうの。そりやアノ、誰に稽古なさったぞ、アノ、そのお師匠様は何と云ひますえ。コレ尾上殿くくく、エ、こな人わいの、人にばっかりもの云はせ此方は耳でも潰れたか」と囁つけられて尾上はただ赤らむ顔を押し隠し

「お恥しい事ながらその心掛けは」

「ないと云ふのか、アノ心掛けはないくオホ、く、皆の者アレ聞きや、重ひ役を務めながら心がけはない、心がけはないといのオホ、く、マ我折れ。そりやアノ何ぢやぞえ、ヲ、ほんにこれが禄盗人ぢや、知行盗人ぢや、盗人ぢやくく、何とさうではあるまいか」

とまくしたてたる雑言を尾上は堪へくても無念の涙保ちかね歯を喰しぱり耐へいる。

「ヲ、何ぢや泣かしやるか、ヲ、ちと堪えふ、口惜しかろ、町人の娘でも今では武家の御奉公人、ヲ、口惜しかろ、道理ぢやくく。ヤほんにそふぢやわいな。最前も仰しやるには心つかぬ事あらば御指南頼むと云はしやんしたの、ム、ドレ教へてやる」

と立上がり持ったる扇振り上ぐれば、身をかはして打落す、手向ひなさは一打ちと懐刀抜き放せば、『これは』と驚く女中たち。尾上もいまは堪りかね、ともに抜かんと立寄りしが、思ひ廻せば廻すほど大恩受けし御主人の御先途も見届けず、わが身に過ちあるならば、後に残りし親たちの御歎きはいかばかりと、堪へる辛さ苦しさは、胸もはり裂く血の涙、身も浮くばかり嘆きしは、傍で見ると目も哀れなり。

「ム相手にならぬは岩藤が怖いのか。ヲ、怖い筈、道理ぢやく。そんならモウこりや納めませうの、ドレ

「帰りましたよ、ほんにこなさんにかゝって、ヲ、コレ見やしゃんせ、足袋も草履も砂まぶれになったわいな。イヤナニ尾上殿へ、ナントこの草履の汚れたのを拭いて下さんせぬか」

「アノ私に」

「ライノ」

「エ、」

「いやか〜」

「ぢやと申して、それがマア」

「それがマア、刃物汚しせうよりは幸ひなこの草履」

と、足に掛けたる土草履押つとつて、尾上がかしら頭テウ〜

〜。

「これは」

とばかり奥女中、気の毒あまり立騒ぐを尾上は声かけ、

「ア、コレ〜騒ぐまい〜女中達。岩藤様がこの尾上

を御意見のための御打擲、わしや有難うて〜、母様の御折檻と思ふてこの身の節々まで有難うて忝い、

ホ、〜、イヤ申し岩藤様、生みの親も及ばぬ御意見

エ、有難う存じます。この上は随分と武芸をも心掛け

て御奉公をいたしませう。また、この草履は私がために

は御教訓のこの一品、申し請けて私が守り」

と、懐中したる心根は言はぬ色をやいひ草履、胸に納め

し利発さよ。流石の岩藤呆れ顔

「何ぢや、その草履わしに貫ふて守りに掛ける、アノ、

守りにや。テモ恐しい辛抱な人、意見した甲斐がある。

以後をキツと嗜ましゃれ。サア〜行きませう〜、お

暇申さつ」

と替草履、心は後に尾上をば、にらみ廻して立帰る。

ごしよざくらほりかわようち

べんけいじょうし

御所桜堀川夜討

弁慶上使の段

〔解 説〕 文耕堂、三好松洛の合作で、元文二年（一七三七）大阪竹本座にて初演。源平の戦いを背景に、「平家物語」、「義経記」、弁慶や静御前の伝説を脚色した全五段の時代物です。三段目「弁慶上使」の段は人気が高く、文楽・歌舞伎でもしばしば上演されています。

〔弁慶上使の段 あらすじ〕 源平の戦い後、頼朝は義経に謀反の疑いをかけていました。義経の正室卿の君は平忠時の娘であったため、義経は頼朝から忠誠を示すために卿の君の首を差し出せと言われていました。

懐妊中の卿の君が侍従の太郎夫妻の館で静養しているところへ、弁慶が堀川御所からの使いとして現れます。

弁慶との密談を終えた侍従夫妻は、腰元の信夫（しのぶ）を卿の君の身代わりにと懇願しますが、信夫の母おわさは承知しません。十八年前に一度契って別れたきりの信夫の父親に娘を会わせるまでは死なせるわけにはいかないと、当時稚児であった相手の着ていた振り袖の片袖を見せてそのいきさつを語ります。その時、襖の向こうでこの話を聞いていた弁慶が、突然襖越しに信夫を刺したのです。一同が驚くなか、弁慶は片肌を脱ぎ、おわさが持っているものと同じ片袖を見せ、自分が信夫の父親であると明かすのでした。驚きと悲しみにおわさは号泣します。弁慶もまた父と名乗れぬまま、娘を手になかなかつけなければならなかった悲しみに、生涯ただ一度の涙を流すのでした。

風情ぞ道理なり。

ややあつて侍従夫婦奥より出づる屈託顔。おわさ目早く

「これはこれはお二方様。どふやらお気の済まぬ御容態。御内談とは何事でござります」

「ア、ハイイヤヤ氣遣いな事ではない。ナニおわさ、某とくより汝に頼む子細あり。何と聞いてくれふか」

「ハイこの身に叶ひし事なれば」

「ホ、過分過分。その子細は別儀でない。今日武蔵坊来たられしは義経公、叛逆人時忠の娘卿の君を妻と定めゐるからはこれ同腹中。一味でなくば首討つて渡せと鎌倉殿の御難題。御幼少より育て上げた姫君様、何と刃が当てられふ。殊に只ならぬ御身の上。弁慶殿も討ち兼ねてとつ置いつ思案の上、御身代りを立てまいか、ヲ、その身代りは誰彼と詮議の上、年の頃盾形面

ざし似たるこの信夫。一日にてもその方は御恩を受けし御主の身代り。サ、この所を聞き訳て命をくれい死んでくれ」

と涙と共に語るにぞ。始終の様子聞く信夫、涙を押さへ傍に寄り

「ノウその御詞に及びませふか。十年に余る宮仕へもたった一日御奉公申してもお主様に違ひはない。不束な私でもお役にさへ立つならば」

「ア、コレコレ母を差し置きつかつかと物云やんな。ハイハイこの子はアノ私一人で出来た子ではござりませぬ。顔も知らず名も知らぬ父親がござります。その親を尋ね手渡しする迄は」

「ア、コリヤコリヤ如何に狼狽ればとて母親ばかりで出来る子が三千世界にあらうか。その上顔も知らず名も知らぬ父親を尋ね手渡しするとは、何を印に尋ぬ

るぞ。アノこゝな偽り者めが。ハア子心にさへ主従の道を弁ふるに見限り果てたる女め。娘を連れて早帰れ。サ花の井こちへ」

と立ち上がる。

「なふコレ待つて下さりませ。偽り者と云はれては親故この子の満ち立たず。顔も知らず名も知らぬ夫を尋ぬる印はこれ」

と上の一重を押し脱げば、右は変はらぬ詰袖に左ばかりが振袖の濃き紅の染模様。橘ならぬ袖の香の昔ゆかしく忍ばしく

「娘が聞く前恥づかしき昔咄。私は元播州姫路の近在福井村本陣の何某こそ私が父母。十八年以前、頃は夜も長月の二十六夜の月待ちの夜。数多泊りのその中に、二八余りの稚児姿。こつちに思へばその人もすれつもつれつ相生の松と松との若緑露の契りが縁のはし。

ヲ、恥づかしや、つい暗がりの転び寝に、つらや人の足音に恋人も驚きて、起き行く袂控ゆるを振り切り急ぎ行く拍子、ちぎれて我が手に残りしはこの振袖。仮寝の情は浅けれども妹背の縁や深かりけん、その月より身も重く懐胎し、後にて何と詮方も産み落とせしはこの信夫。縁あればこそ子迄設けしもの。この振袖をしるべにて再び尋ね逢はんと思ひ国を出で、十七年嬰兒を抱へ様々とさまよひ廻りし憂き艱難。今に尋ね逢はねども、女の念力これこそは娘よ父よと名乗り合ひするそれ迄は、蚤にも喰はせぬ大事の娘。お役に立てぬは右の訳。卑怯未練でない申し訳。ナ申し娘にはどうぞお暇を下さりませ。サ信夫立ちや立ちやエ、マ立ちやいの」

と云へど立ち兼ね見捨て兼ね、親子心の隔ての一重。始終聞き入る武蔵坊、信夫が背骨障子越しぐつとさい

て一決り。

「うん」

と悶ゆる苦しみに

「こはこは如何にこは如何に」

と傍で見る目の三人は呆れ果てたるばかりなり。母は泣くやら氣は狂乱。

「ム、扱は夫婦と云ひ合はせ、大事の大事の娘をばようもようもむごたらしい。サ、サ、元の様にして返しや」

と武蔵にしっかりと継り付き泣くより外の詞なく。弁慶真ん中にどつかと座し

「コリヤ声低にほざきおらう。これには深き子細のある事。とこ吠へずとこれ見よ」

と押し肌脱げばコハ如何に、下着の衣の紅に大振袖の伊達模様。

「ヤアその振袖は」

「ヲ、この片袖はそつちにある筈。いつぞや播州福井村にて人目を忍び暫しの仮寝。扱は汝であったよな」

「エ、そんならお前がその時のアノお稚児様かへ」

「ヲ、書写山の鬼若丸だ」

「エ、スリヤこの娘は真実お前の真実お前の子じゃないかいな」

「ヲ、サ初めて顔見る仮寝の父親。殺したはお主の身代りだ」

「ハアはつ」

とばかりに母親は、娘の傍に走り寄り

「これ娘あれを聞きやったかいの。そなたの父御といふはアノ弁慶殿じゃといの。サちやつと御対面申しやいの」

と抱き起こせば起こされて

「かゝ様何やらおつしやるそふなが耳が聞こへぬも
ふ目が見へぬ。私や今こゝで殺されてお主様の身代り
に立つと思へば嬉しいが、親一人子一人の私に別れて
便りなきお前の御身が案じられ、そればかりが黄泉
路の障り。イヤ申し御夫婦様、頼りのないこのかゝ様
どふぞお頼み申します。又かゝ様も今からはお二人
様を大切に、お身を大事に長生きしてとゝ様に廻り合
ひ、仲よふ暮らして下さんせエ。又二つには私も不憫
と思ひ朝夕の御回向無頼み上げます。こればかり
が」

と云ふ声も次第次第にせぐり来てはかなく息は絶え
にけり。母は死骸を抱きしめ

「コレイノウコレ信夫、今一度物を云ふてたも、これ
が一世のこれが一世の別れかいの。云ふて返らぬ事な
がら、背丈伸びるに従ひて只とゝ様に逢ひたいと慕ふ

子よりもこの母が、どふぞ逢ひたい逢ひたいと尋ねさ
まよひ国々を、廻り廻りて今こゝで逢はぬがましであ
つたもの。死ぬる今はの際迄も誠の父と知らずして、
母をかばひし心根がいぢらしいやら悲しいやらこの
胸が裂く様な。同じ殺す道ならば互ひに父よ娘かと名
乗り合ひした上ならばこの思ひはあるまいもの。これ
ばかりに引かされて三途の川と死出の山。迷ふてた
もんな迷はぬ様、道は一筋はるばるぞや。法の光や燈
火の影を力にとぼとぼと歩む姿を目の先に今見る様
に思はれて、可愛いはいの」

とばかりにて、空しき死骸を抱きしめ声も惜しまず泣
きあたる。弁慶涙押し隠し

「最前より一間にて汝が咄聞くと等しく、扱は我が子
と飛び立つばかり。生き顔も見たかりしが、なま中見
つ見せては未練な心も起こらんかと腕に任せて扱ひ

なつまつりなにわかがみ

ながまちうら

夏祭浪花鑑

長町裏の段

〔解説〕

延亨二年（一七四五）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛、竹田小出雲による全九段の世話物です。浪花の夏祭りを背景に、市井の男の友情と心意気を描いたこの作品は、人形浄瑠璃、歌舞伎ともに人気作となっています。

〔あらすじ〕

泉州浜田家の家臣玉島兵太夫の息子磯之丞と恋仲の遊女琴浦は、横恋慕する大鳥佐賀右衛門らから何かと妨害を受けますが、魚屋団七と女房お梶、元侠客三婦や義兄弟の契りを結んだ徳兵衛が、二人を助けるために働きます。磯之丞は訳あって人を殺めてしまった為に、琴浦共々三婦の家に身を隠しています。たまたま徳兵衛の女房お辰が夫を迎えに備中から来たので、三婦は磯之丞をお辰に託すことにしました。そこへ団七の育ての親、舅でもある義平次が金目当てに現れ、団七に頼まれたと嘘をつき琴浦を連れ出します。

それを知った団七は慌てて追いかけ、もみ合ううちに舅を殺してしまいます。〔長町裏の段〕

捕り手に囲まれた団七は、徳兵衛の機転で一旦は逃れますが、ついには縄打たれてしまいます。しかし、磯之丞や兵太夫らがその減刑を求めるのでした。

追駆くる。

神と仏を荷もつひ物囃し立てたる下寺町、高津宵宮よみやの賑にぎひに紛れて急ぐ舅義平次、駕籠の簾すだれを細引でぐるぐる巻き
にはか網、追立て行くを後よりも。

「オ、イ、〜」

「ア、駕籠の衆、早うやつてくださされ、早う〜」

「待った〜」。コレ申し親仁様、この女中は知つての通り、恩ある方からの預り人、それをこなた、どこへ連れてござります。コリヤてつきりと悪者に頼まれ、金にする気であらふが、さふしられてはこの九郎兵衛の顔が、どふも立ちませぬ。コレ申し親仁様。エ、こなたは〜、こなたはなふ。この中ちゆうも内本町の道具屋で、田舎侍に出で立ち、贗香炉をもつて五十両の騙り事。エ、マ見下げ果てた。重ねてきつと申うてからが、嗜む心もあるまい。ヤアコレ駕籠の衆、大儀ながらその駕籠、後へ戻して貰はう。サア早ふ〜」

「ア、コ、コリヤ待て、待て〜」。なんぢや、嗜

む心があるまい。見下げ果てたとは、へ、忝かたじけない。その愛想尽かし待つてゐたわい。コリヤ、六年この方おれが娘を女房にして、慰みものにして。サア揚代あげだいせふかい」

「サアそれは」

「それはとは。ヤイ、アノこゝな恩知らずめが。コリヤヤイ、おのれは元宿無団七すいほうというて粹方仲間の小歩き。貰ひ喰ひで暮してをつたを引上げて」

「ア、申し〜親父様、なにもそれをこゝで仰しやらいでも」

「言うたらなんぢやい、言うたらなんぢやい。エ、言はいでかい〜。その後堺の浜で魚売りさせ、まだその上にいつの間にやら娘のお梶とち〜くりやがつて、市松といふ子までへり出さしをつた。それからアノ月々の当てがひ。取るがよさに目を眠ねぶつてゐる中、乳守ちもりの町で喧嘩仕出だし、和泉の牢むしへ構つて、百日の上女房子を、コリ

ヤ誰が養ふたと思ふぞい」

「サアそれはみな、お前様のお世話」

「ヤイ／＼抜かさない／＼。せめてその入目を入合はさふと思ふて、儲け事にかゝりや、おのれが道具屋の内にけつかつて、よふぼくを上げさしたな」

「イヤ、それはその場のツイ」

「まだ抜かすかい／＼。今日琴浦をちよろまかして来たのはナ、惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し、大金おおがねにする気ぢやわやい」

「イヤサ、それではこの九郎兵衛がどふも顔が」

「立たぬ、立たぬか。アノ長々おせがひ頤を養ふた、コ、この顔が立たぬかやい。ただしこちらの、コ、この頬桁が立たぬか」

と、立蹴たちげにはつたと蹴られても、『舅は親』と無念を堪へ、齒を喰ひしぼりゐたりしが。

『とかく詫びるに如くはなし』と、揉み手の上に膝折り

かゞみ、

「イヤ申し親仁様。段々の仰せ、一つとして返す詞もござりませぬ。長々お世話の上、またしても／＼金儲けを妨げ、お腹の立つは御尤も。ガもふこれからはふつ／＼とお邪魔は致しますまいが、あの女中のことばかりは」

「イヤならぬ」

「サ、左様でござりますれど」

「エ、ならぬわやい」

「サ、／＼そこでござります。折角あなたもこれ程までなされた事。素手でお詫びも申しますまい。ヤ幸ひ友達

共が、頼母子たのもしを致してくれまして、こゝに三十両ござりござりますれば、これをお前へ渡しませふ程に、身の代取つたと思し召し、琴浦殿を三婦が方へ戻して下され。外ほかへやつてはこの九郎兵衛の顔が、どふも立ちませぬ。情ぢや慈悲ぢや、コレ親仁様、一生の御無心。申し／＼コレ申し

と、手引き袖引き膝をつき、無念涙の男泣き、親といふ字は是非もなや。義平次も三十両、当分取りに少しは柔らぎ、

「その金われ、そこにあるのかい」

「へい、その金はここにござります」

「そりやアノ、ほんまの金かいやい」

「エ、ほんまでござります。へいこの通りでござります

〜」

「ム、琴浦をあつちへ渡せば、百両が物は確かにあれども、かゝりや繋がる娘の縁。よいは、ただやつたと思ふて、三十両で戻してやろ」

「エ、そんなら戻して下さりますか。ヤレ嬉しや〜」

「ア、コレ駕籠の衆、今乗せて来た所まで駕籠を戻して、駕籠代も酒代も存分先で取られい。暑い時分に御苦労ぢやがモウ一肩やつてくれ」

「ヤ駕籠の衆、確かに届けて下されや。暑い時分ぢや、

御苦労ぢやが頼んだぞや〜」

「コ、兄、兄。マ、こつちやへ来い、マ、こつちやへ来いやい。へ、へ、兄、暑い、エ、暑い」

「へい左様でござります。ヤモきつい暑さでござりますな」

「コ、兄。そなたは定めて嬉しかろの」

「イヤモ、この様な嬉しいことはござりませぬ。親仁様、ありがたうござります、ありがたうござります」

「ヲ、さふであらう〜。時に俺にもどふぞ、悦ばして下されい」

「ヤ、悦ばせ、とはなんでござります」

「ソレイノ、今の、ノ、ソレ約束の」

「エ、約束の。ソリヤマアなんでござりましたな」

「これはしたり。あんまり日が長いので、物忘れをしておたかいの、ソレ今の約束の三十両、受取らふかい」

「エ、そのカ、金でござりますか。その金はこゝには
ござりませぬ」

「チエ、ヤレその駕籠やるのぢやない、駕籠戻せ」

「申し、親仁様」。マ、待つて下され
〜

「エ、腹の立つ。うま、一杯やりをつたなア」

「イエ、なんの申し、左様ではござりませぬ。うちへ
帰れば心当てが。マ、マア、こゝを放して下さりませ

〜

「ヤアどこへ。うぬがやうな売憎めは、かふして腹
癒ようか、かふしてくれうか」

「ム、」

「その面付きなんぢやい。肩臂張つてその眼付きなん
ぢやい。コリヤヤイ、舅は親。ア、慮外ながら、親に向
つて白眼ケ、蹴潰すぞよ」

「ム、ム」

「無念なか、口惜しいか。ムハ、泣くかいやい。ア、
可愛や可愛やな。ド、その頤をこの雪駄の皮でさす
りがめてやるか。コリヤこの頬桁で俺を騙しやがった
か。コ、この口で騙しやがったなコウ、これ喰
〜

「ア痛た、ア。親仁様。モこれ程になされたら、御存
分でござりませぬ。モウ、御了簡なされませ〜。コ

リヤコレ男の生面を」

「割つた。割つたがどうした」

「ウム、コリヤモウいつそ」

「なんぢやいな、おのりや脇差をびこつかして。

ア、コリヤ面白い。サア、斬れ」

「ア、イヤ申し滅相な」

「サア斬れ、イヤ斬らりよ。サア斬れ、この赤鯛でやつ
て見るか」

「ア、申し危なふござります〜」

「ア、斬らりよ、斬れ〜」

「なんのわたくしがお前様を」

「イヤ〜切る気であらふ。コノ尻からやるか。サア斬れ〜」

「ア、滅相な〜」

「コノ腕からやるか。サア斬れ〜、斬れ」

「ム、ム、ム」

「コリヤ、親ぢやぞ、親ぢやぞよ。一寸斬つたら一尺の、

竹鋸たけのこぎりで引返す。サア斬れ〜

「ア、申し危なふござります〜」

「突け〜」

と、差し付け突き付けせり合ふ中、思はず鼻が耳の根ずつくり、

「サア、サ、斬れ、何しとるんぢや、斬らぬかやい、斬る気であらふが」

「ア、危なふござります、危なふござります。危なふ〜」

ざります」

「兄、わりやおれを斬りやがつたナ」

「なんの滅相な」

「ヤレ人殺しぢや」

「申し怪我でござります、怪我でござります」

「イヤ〜親殺しぢや〜」

「ア、コレ、声が高い〜、声が高ふござります、声が

高い〜。ム、コリヤモウ是非に及ばぬ、毒喰はば皿

〜てうさぢや、ようさぢや

「てうさぢや、ようさぢや、てうさ、ようさ〜」

悪い人でも鼻は親。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

八丁目、指して